

大阪春秋

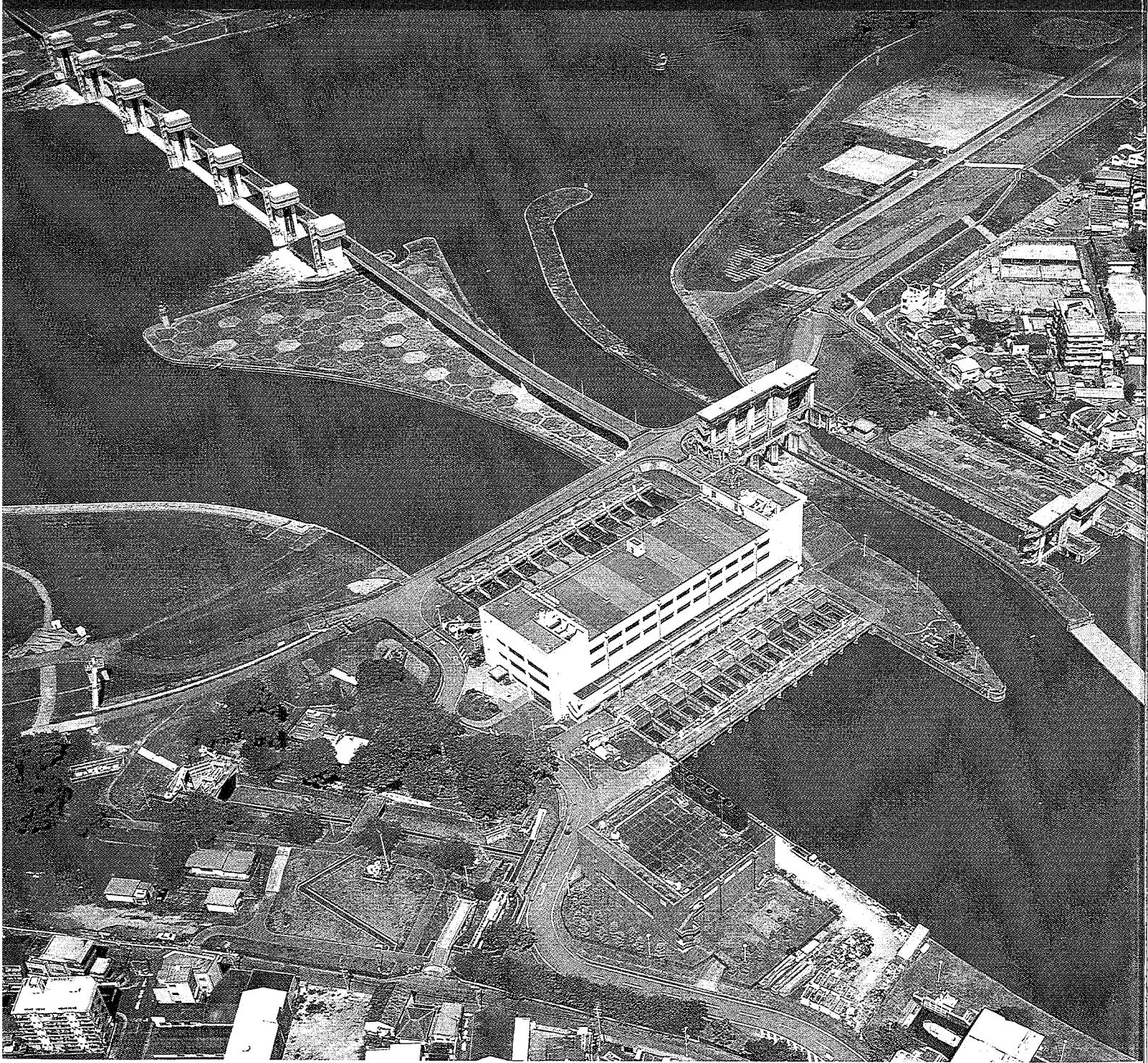
平成20年
秋号

AUTUMN 2008

大阪の歴史と文化と産業を発信する

OSAKA SYUNJYU

通巻 No.132



特集 水の都おおさか

- 泥の河・大阪の川“街川”的再発見
- 大阪天満宮 御旅所の変遷と江戸時代の天神祭船渡御
- 大阪の渡船 ■ 「毛馬の閘門」探訪記
- 近代大阪の観光と観光艇「水都」
- 肥田咲三先生に聞く 大阪の川と水あれこれ
- 付録：“De Stadt OSACCO”—《大坂図》(『モンタヌス日本誌』より)

水内俊雄・加藤政洋・大城直樹 著

『モダン都市の系譜』

地図から読み解く社会と空間】

高橋 愛典

(近畿大学経営学部准教授)

危機直後の大阪は、大工場と映画館とボウリング場がまだ多い。「観光案内図」には、問屋街が多数掲載されている。大阪に持ち帰り、時折眺めて新たな発見を探していることは言うまでもない。

本誌の読者の方々はよくご存知のように、地図を読むこと(読図)は掛け合なしに面白い。冒頭から私事で恐縮だが、先日、実家に帰った折、私が生まれた年に発行された『大阪区分地図』を見つけた。第一次石油

学者は、一枚の地図からどれだけの情報を読み取り、どのように解釈しているのだろうか。今回取り上げる『モダン都市の系譜』は、京阪神の地図を題材に、「プロの読図」の過程をさまざまと見せててくれる。

本書は、第一部「近代都市空間の成立」、第二部「モダン都市」、第三部「戦災と復興」、第四部「高度成長と現代の都市空間」

からなり、前近代

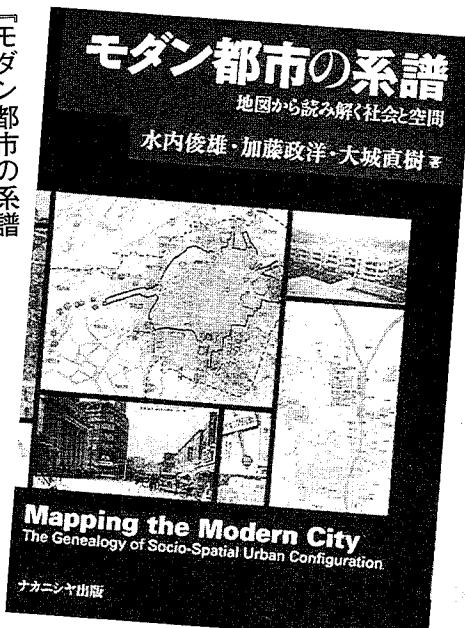
から現代まで、基

本的に時系列の構

成である。各部は

二、三の章から構成され、さらに各章の最後にある「特論」では、より濃密な事例研究が試みられている。

地理学の本であるから、もとより事例を通じた実証



『モダン都市の系譜』

地図から読み解く社会と空間】

A5判 335頁 2800円+税
ナカニシヤ出版

研究の志向が強いが、京阪神の中で

も、これまであまり光が当てられて

書に当たるものを作筆していただけないのである。

本書では、横溝正史や宇野浩一の文学作品を取り上げられているが、かつた事例をも十分に論じている。例えば、第四章の「郊外の誕生とその発展」は、大正から昭和戦前期にかけての私鉄による沿線開発を取り上げている。最も有名かつ典型的なのは阪急であるが、本書はそれに留まらない。後発で今はない(戦時国

有化されて現在はJRとなつていて)阪和電鉄についても、その沿線開発の具体像を、パンフレットといった図版を用いて明らかにしている。また、普通の地図に記載されることの少ない、社会的マイノリティ(在日コリアン、あいりん地域等々)の存在と動向も、写真や住宅地図、新聞記事など、豊富な資料に基づいて論証し、温かい眼差しを注いでいる。

本書の著者の先生方は、近年、きわめて精力的に研究成果を出版されている。本書の次に何が来るのか、当然期待されるところである。私個人の勝手な願望として、高校生・大学生初年次向けの読図ガイドを是非、世に問うていただきたいと考える。本書も、大阪市立大学の初年次向け共通教育(いわゆる一般教養科目)の教科書であるようだが、次は自習

本で、横溝正史や宇野浩一の文学作品が取り上げられているが、かつた事例をも十分に論じている。例えば、第四章の「郊外の誕生とその発展」は、大正から昭和戦前期にかけての私鉄による沿線開発を取り上げている。最も有名かつ典型的なのは阪急であるが、本書はそれに留まらない。後発で今はない(戦時国

有化されて現在はJRとなつていて)阪和電鉄についても、その沿線開発の具体像を、パンフレットといった図版を用いて明らかにしている。テレビドラマ化もされた『白夜行』は、近鉄布施駅前のシーンから始まる。例えば、東野の作品を読図する過程を題材にすれば、高校生や大学生が持ちがちな、地理は暗記科目であるというイメージから脱却し、ディープかつ多様な「オトナの地理学」への誘いとなるのではないだろうか。

評者プロフィール

1974年千葉市生まれ。1996年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。

2002年早稲田大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得退学。2005年博士(商学)早稲田大学。早稲田大学商学部助手、近畿大学商経学部講師等を経て現職。専門は交通論、ロジスティクス論、商学。

著書に『地域交通政策の新展開』(白桃書房、2006年)がある。